平成30年北海道胆振東部地震

あの日から1年

昨年9月6日3時7分、北海道では観測史上初となる震度7の揺れが突然厚真町を襲いました。広範囲にわたる土砂崩れや家屋の倒壊、道路が破壊され、私たちの日常が一変しました。

深い悲しみや度重なる余震の恐怖、今後の生活への不安を抱えながらも、少しずつ復旧・復興へ歩みを進めてきました。農地や宅地に流れ込んだ土砂や被災した家屋は徐々に撤去され、復旧工事が進み、発災当時の景色から変わりつつあります。

あれから1年がたち、前に踏み出した人もいれば、なかなか踏み出せずに悩んでいる人、まちに元気を取り戻そうと奮闘する人など、それぞれの思いも置かれている状況もさまざまです。激動の1年を振り返りながら、住民の声や町の動き、復旧・復興への歩みを紹介します。

山崩れ防止のため治山工事が進む吉野地区

仮設住宅の横の畑で入居者同士が交流

ひとのうごき

令和元年8月31日現在　（　）内は前月比

人　口　4,571人（+2）
男 2,283人　女 2,288人

世帯数　2,144世帯（−3）

8月1日～8月31日届出分

※窓口などで、広報紙への掲載について確認できた方を掲載しています

「広報あつま」はホームページでもご覧いただけます
http://www.town.atsuma.lg.jp/office/

広報あつまの電子書籍はこちらから。
www.hokkaido-ebooks.jp
北海道内のすべてがそろう"電子書籍"ポータルサイト「ホッカイドウ イーブックス」
Hokkaido ebooks
ホッカイドウ イーブックス実行委員会（株式会社 須田製版 内）Tel.011-621-1000（代表）

明日の厚真への"愛"ことば

ATSUMA LOVERS

広報あつま

2019年
令和元年 9月号

もくじ
CONTENTS

2　ひとのうごき
3－9　北海道胆振東部地震　あの日から1年
10　災害復旧工事
11　北海道胆振東部地震被災者支援情報
工事のお知らせ
12－14　お知らせ
15　消費税・地方消費税の税率は10%へ
16－17　国民年金
18－19　まちの話題
20　日本舞踊こども教室
プラネタリウムチャリティコンサート
臨時職員募集／まちのアイドル
21　第19回集まリンピック
22　地域おこし協力隊／生活支援員だより
災害ボランティアセンターだより
23　厚高インフォメーション／将来の夢
24　防災のページ／北海道地域防災マスター認定研修会／厚真町防災アドバイザーの紹介
25　気象台ノート／「平成30年北海道胆振東部地震を振り返り今後の減災・復興を考える」シンポジウム＆現地見学会
26　健康情報
27　脳力アップ教室／食生活改善推進員養成講座
28　保健の掲示板
29　子育て支援センター
30－31　情報ひろば

今月の表紙
COVER

東日本大震災の被災地から送られたヒマワリが満開を迎え、満面の笑みを浮かべる仮設住宅の入居者。

全世界の皆さんに支えられ、震災から1年を迎えました。

震災からの1年

深い爪痕を残した北海道胆振東部地震から1年がたちます。町内の建物被害は8割を超え、今も377人が仮設住宅などでの生活を余儀なくされています。仮設住宅の入居者の想いとともに、この1年の歩みを振り返ります。

建物被害数（7月末現在）

	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	被害なし	合計
住　家	233棟	69棟	260棟	1,085棟	195棟	1,842棟
非住家	673棟	161棟	505棟	808棟	656棟	2,803棟
合　計	**906棟**	**230棟**	**765棟**	**1,893棟**	**851棟**	**4,645棟**

仮設住宅等入居者数

区　分	入居開始日	平成31年2月19日現在		令和元年7月末現在	
		世帯数	人数	世帯数	人数
応急仮設住宅	第1期：平成30年11月1日 第2期：平成30年11月30日	124世帯	282人	123世帯	281人
みなし仮設住宅	平成30年9月27日	18世帯	30人	18世帯	30人
公営住宅	平成30年9月8日	27世帯	63人	19世帯	42人
トレーラーハウス	平成30年12月27日	11世帯	24人	11世帯	24人
合　計		**180世帯**	**399人**	**171世帯**	**377人**

左：町内8カ所に建設された応急仮設住宅
右：自宅を離れることが難しい農家などのために設置されたトレーラーハウス型の仮設住宅

9月

6日
・3時7分地震発生（震度7 マグニチュード6.7）
・厚真町災害対策本部を設置

7日
・気象庁が「平成30年北海道胆振東部地震」と命名
・厚真町災害ボランティアセンター開設
・避難者の数がピークに（避難所6カ所に1118人が避難）

8日
・24カ所で災害ごみの受け入れ開始

12日
・り災証明書の交付申請の受付開始

15日
・役場前に犠牲者追悼の献花台を設置

18日
・町内小中学校4校と北海道厚真高等学校が授業を再開、町内こども園2園が再開
・住家被害認定全戸調査開始

20日
・臨時災害放送局「あつま災害エフエム」開局

24日
・8カ所で応急仮設住宅の説明会を開催

28日
・閣議決定により「平成30年北海道胆振東部地震による災害」が激甚災害指定へ

30日
・り災証明書交付開始
・台風24号接近に伴い17地区151世帯340人に避難勧告を発令

10月

1日
・台風第24号の接近に伴い町内小中学校が臨時休校
・復旧・復興業務を一元的に担う部署として総務課災害復興グループを設置
・青少年センター図書室再開
・生活再建支援制度申請受付開始

5日
・地震発生（震度5弱 マグニチュード5.2）

6日
・住宅の応急修理受付開始
・台風第25号接近に伴い17地区151世帯340人に避難勧告を発令

9日
・町内の水道管復旧作業が終了

11日
・被災家屋の解体・撤去の申請受付窓口と相談ダイヤルを開設

14日
・陸上自衛隊・航空自衛隊による支援活動が終了

16日
・生活再建に向けた支援ガイドブック第1版発行

22日
・安平・厚真行政事務組合じん芥処理場が再稼働

29日
・義援金の配分申請受付開始

11月

1日
・こぶしの湯あつま営業再開（露天風呂以外）
・応急仮設住宅入居開始

15日
・当時の天皇（現上皇さま）、皇后（現上皇后さま）両陛下がご訪問

19日
・JR日高線（苫小牧～鵡川間）運転再開

12月

6日
・総合福祉センター・スポーツセンター避難所の閉鎖により、町内全ての避難所が閉鎖

15日
・平成30年北海道胆振東部地震厚真町慰霊式開催

26日
・「明日の厚真への愛ことば ATSUMA LOVERS」作成

28日
・災害対策本部を廃止
・厚真町胆振東部地震復旧・復興推進本部を設置

1月

21日
・応急福祉仮設住宅入居開始

27日
・復興イベント「絆～手と手を繋いで頑張ろう厚真」開催

30日
・地区ごとの住民懇談会開催

2月

20日
・住宅の応急修理支援受付開始

21日
・21時22分地震発生（震度6弱 マグニチュード5.8）

3月

1日
・厚真町復旧・復興計画策定方針を策定

11日
・共同仮設店舗「京町キューブ」設置

4月

1日
・被災された方の総合相談窓口開設

6日
・被災家屋等の公費解体開始

22日
・住宅リフォーム補助受付開始

23日
・被災した鹿侵入防止柵約40㎞の設置作業開始

5月

1日
・こぶしの湯あつま露天風呂営業再開

6月

1日
・東京2020オリンピック聖火リレー北海道ルートの中に選出

15日
・第47回あつま田舎まつり開催

29日
・災害関連死1件を認定

7月

1日
・一部損壊以上の家屋等の解体費補助受付開始

27日
・復旧・復興計画策定に向けた町民アンケートを実施

8月

8日
・吉野地区に献花台を設置

24日
・第1回あつま復興未来会議を開催

段ボールベッドが並んだスポーツセンター避難所（9月16日）

13日ぶりに授業が再開した厚真中央小学校（9月18日）

東北地方や道内の自治体からの応援により、り災証明書の交付申請窓口を開設（9月30日）

災害ごみが集積された新町パークゴルフ場（10月10日）

Interview あなたの1年

表町仮設団地入居者
加賀谷（かがや）俊昭（としあき）さん（79歳）
工藤（くどう）光子（みつこ）さん（82歳）
末政（すえまさ）久美子（くみこ）さん（81歳）

左から末政さん、工藤さん、加賀谷さん

仮設団地には、さまざまな地区の住民が入居していますが、自宅で採れたミニトマトやキュウリなどの野菜、ご飯のおかずを入居者同士お裾分けすることも多く、支えあいながら楽しく過ごしています。

昨年12月に社会福祉協議会の相談員に協力してもらい、談話室で茶話会を開き交流する場を作りました。今では毎月定例会を談話室で開催し、ごみ出しのルールや暖房器具の使い方の確認、イベント情報の共有、困りごとの相談などを話しています。また、今年2月21日の地震の際には、入居者同士が部屋を周り、安否確認を行うほど協力的です。

談話室では体操教室や編み物教室などが開催され、入居者だけではなく近隣の住民も集まる場になっています。今でもこうしてボランティアの方たちが訪問してくださり大変感謝しています。

仮設住宅に入居して約10カ月がたち、次の住まいをどこにするか悩んでいる人も多くいます。入居者の中にはすでに住まいを決め退去している人、災害公営住宅の入居を希望している人も数名いますが、自宅に戻りたいと思いながらも、裏山が崩れそうで怖いから戻れないという人やペットと一緒に暮らせる住まいを探している人など抱えている悩みはさまざまです。

さまざまな事情を抱えながら生活を送っていますが、皆が笑顔で仮設住宅を退去する日を迎え、再出発できればと思っています。

最後の閉鎖となった総合福祉センター避難所（12月6日）

577人が参列した平成30年北海道胆振東部地震厚真町慰霊式（12月15日）

4事業者が入居する共同仮設店舗「京町キューブ」（3月11日）

吉野地区に設置された献花台（8月8日～8月18日）

支え合い

全国から支援に駆け付けてくださる人、義援金やふるさと納税を寄付してくださる人、励ましの言葉など地震発生から現在まで物心両面にわたる多くの支援をいただいています。
町内外の厚真町を想う人同士、支え合いながら今日を迎えています。

社会福祉協議会の生活支援相談員が被災した方を巡回訪問し、安否確認や見守り、総合相談などを行っています。

生活環境の変化や慣れない暮らしによる心身をケアするため、応急仮設住宅の談話室では、ボランティアによる体操教室を週１回開催。

現在も公費解体前の住宅の家財移動や炊き出しなど支援をいただいています。

災害ボランティア	延べ5,161人	（8月21日現在）
町配分義援金	8億4,782万円	（7月末現在）
北海道配分義援金	7億3,560万円	（7月末現在）
支援金	2億2,513万円	（7月末現在）
ふるさと納税	11億3,440万円（代理受付：8自治体）	（7月末現在）

※義援金…自治体や赤十字、赤い羽根共同募金、報道機関などが受け付け、被災者に平等に分配されます。
※支援金…寄付者が選んだ支援したい団体や機関に対して送られ、被災地での活動に使われます。

Interview あなたの1年

厚真町民生委員協議会　会長　大橋（おおはし）　正治（まさはる）さん（71歳）

町では20人の民生委員と2人の児童委員が担当地区にお住まいの方の見守りや相談など必要な援助を行っています。日頃から単身高齢世帯や子育て世帯、障害者世帯を中心に訪問し、生活上の問題解決に努めています。
発災時はまず、自治会・消防団・自警団などと連携を図りながら担当地区住民の安否確認に回りました。避難所生活を送る方、自宅に戻って過ごしている方、離れて住む家族のもとに避難した方など住民の状況はさまざまで、人の動きを把握するだけでも大変でした。委員の中には避難所生活を送りながら活動している方もいて、負担が大きかったと思います。
現在も、住民の住まいの場所が少しずつ変化しています。発災前に住んでいた地域の委員と移り住んだ地域の委員が密に連絡を取りながら、見守りや相談支援を続けています。
「私は大丈夫」と、困りごとがあるにも関わらず声を上げない人が特に心配です。表情や声のトーン、行動や会話の内容など日々変化に注意し、行政や関係機関と情報交換しながら住民が安心して生活を送れるよう活動しています。
地震によって生活環境が大きく変わり、精神的な不安に陥りやすい状況だと思います。少しでも不安や悩みがある方は、地域の民生委員・児童委員にまず相談してください。

変わる町なみ

土砂崩れや地震の揺れにより、道路は寸断。断水や停電が発生し、ライフラインが停止しました。
雪解けを迎えた今年の春から、復旧作業は加速し、復旧工事が本格化しています。また、公費解体により被災した建物が撤去され、町の光景が変化しています。

公費解体（8月末現在）

申請件数 ―― 189件
解体・撤去完了 ―― 106件

被災家屋の公費解体は来年３月末までに撤去完了を予定しています。

Interview あなたの1年

厚真建設協会　会長　鈴木（すずき）　英毅（ひでき）さん（54歳）

地震が起きて数時間後の明け方に町職員に呼ばれて役場に駆け付けたところ、町が大変な状況になっていることを知りました。協会員で人命救助や捜索活動のために必要な道路の土砂を撤去したり、重機や照明の手配など、自衛隊や消防などの側面的な支援を行いました。また、避難所へ仮設トイレや照明の設置なども行いました。
捜索活動が終了した後は、道路や河川の土砂撤去作業に取り掛かりました。沢から流れてくる水が土砂にせき止められ、ダム化している場所が６カ所ほどあり、住宅や農地へ水が溢れ出そうな状態で、早急な対応が求められました。危険と隣り合わせの作業でしたが、事故もなく終えることができ安堵（あんど）しています。
道路は土砂を撤去して鉄板を敷くなどの応急的な工事を進めました。ちょうど米の収穫時期でしたので、道路の段差の衝撃でせっかく刈った米がトラックの荷台からこぼれ落ちてしまわないか気がかりでした。
道路と並行して用水路の復旧工事も行いました。全域にわたって被害を受けていましたが、どうにか今年の田植えに間に合うようにスケジュールを組みました。
雪が解けてからは、土木工事、林道の復旧、宅地堆積土砂の撤去、家屋の公費解体などが本格的に始まり、このまま来年度いっぱいは災害復旧工事でフル稼働の状態が続きそうです。
交通誘導員の人員不足や、ダンプ、ミキサー車、コンクリート車、ポンプ車などの重機不足が大きな課題ですが、少しでも町の皆さんが快適に暮らせるように、そして元の厚真町の姿に戻るように関係各所と協力しながら工事を進めていきたいです。

進む復旧工事

まちのこれから

町では、生活基盤の早期復旧と復興に向けた取り組みをまとめた「厚真町復旧・復興計画」を策定しています。住民の皆さんの意向を踏まえた計画にするため、3月から順次、説明会やアンケート調査、個別意向調査を実施しています。

厚真町復旧・復興計画

生活基盤の早期復旧と復興への取り組みをまとめた厚真町復旧・復興計画の第1期計画を策定します。

内容　住民意見の集約やインフラ・公共施設などの復旧計画を策定します。

時期　9月に策定します。

災害公営住宅

住宅再建が困難な方の恒久的な住まいへの移行を支援するため、災害公営住宅を建設します。

内容　新町地区20戸、本郷地区8戸上厚真地区4戸の計32戸を予定しています。

時期　来年10月の完成を目指しています。

富里浄水場

土砂崩れにより損壊した富里浄水場は再稼働へ向けて工事を進めています。

時期　来年8月の本格稼働を目指しています。

あつま復興未来会議

復旧・復興計画 町民ワークショップ

住民参加型の話し合いの場である「あつま復興未来会議」を8月24日に総合ケアセンターゆくりで行い、町の未来について活発な討論がされました。

第1部　復興まちづくり講演
テーマ「中越大地震の知恵～自分たちでつくる等身大の復興に向けて」

平成16年新潟県中越地震以降、各地の災害復興に携わっている長岡技術科学大学の上村靖司教授が講演しました。新潟県川口町（現長岡市）や台湾、米国・サンタクルーズの災害復興事例を紹介しながら、復興へのヒントをお話いただきました。

長岡技術科学大学
上村 靖司教授

復興のために突然新しいことを始めるのではなく、町の伝統や文化、資源を掘り起こして、良い所を磨いていくことが大切です。
震災から立ち直ることも考えながら、これをきっかけにもっと良くしよう、「この町こうしたい」という声を一人でも多く発信して、この声を積み上げて全体の復興ビジョンにしてほしいです。

あつま復興未来会議は、あと2回開催する予定です。次回は10月を予定していますので、ぜひ皆で厚真町の未来について一緒に考えてみませんか。

第2部　ワークショップ
テーマ「あつまの未来を考えよう」

20代から70代までの幅広い年齢の参加者23人が4班に分かれ、「被災から1年がたとうとしている今、思うこと」を踏まえて、「2025年の厚真の姿」をテーマに未来の厚真町について話し合いました。
「こうなりたくない」と思う【避けたい未来】、「こうなりたい」と思える【皆で力を合わせればできる良い未来】の2つを検討した上で、「厚真の復興のためのキーワード」を考えました。

こんな意見がでました

今、思うこと

- 町外、道外では地震の記憶が風化している
- 厚真の知名度はあがった
- 人との交流がなく不安
- 絆が強くなったと感じる
- 震災の経験を他の町や人に伝え防災面などに生かしてほしい
- ボランティアに参加してみたい

皆で力を合わせればできる良い未来

- 「厚真に住んでいて良かったね」と笑い合える
- 災害に強く、安心して暮らせる
- 「みんなで厚真をつくった」と言える
- 子どもたちがボランティアに興味を持っている
- 大人も子どもも楽しめる場がある
- 地元も移住者も一緒に面白いことをしている

避けたい未来

- 建物ばかりが再建されて人がバラバラ
- 移住者と地元の隔たりがある
- 居場所がない
- 森林や田畑が荒廃する
- 子どもが帰って来たくないと思ってしまう
- 行政任せで他人事

復興のためのキーワード

- 世代を超えて分野を超えて交流
- 厚真らしさを考える　・一歩踏み出せるまち
- 地域の誇りをこの後も大事にしたい
- 次世代につながる資産を引き継ぐ
- これからも住み続けたいと思えるまち
- コミュニケーションや信頼関係を醸成
- 厚真のネームバリューを生かして町外に発信
- お金で買えないもの（自然、空気、水、人情、絆、まつり、地域コミュニティ、食の安全）を大切にする

【皆で力を合わせればできる良い未来】のアイディアが多く、厚真の未来に願いを持っている方が多いと感じました。また、将来の災害に対する意見もあり、これからも厚真で住み続けていくには大切な視点だと思いました。

厚真町防災アドバイザー
定池 祐季氏
（東北大学災害科学研究所助教）

愛する町の輝きを再び

本町に甚大な被害をもたらした北海道胆振東部地震から1年を迎えました。農村の見慣れた美しい風景を一変させた突然の出来事でありましたが、犠牲になられた37人のことを想うと、尽きることのない悲しみが胸に込み上げてまいります。

私たちは、かけがえのないものをたくさん失いましたが、本町を応援してくれる多くの方との新たな出会いがあり、新たな「絆」が生まれています。全国から寄せられた温かい真心に応え、遠く険しい道のりではありますが、先人や震災で犠牲になられた方々から託された郷土あつまの輝きを再び取り戻すため、町民の皆さまと一丸となって再び立ち上がり、より一層の努力を重ねてまいりたいと念願しています。

町民ならびに関係者の皆さまには、引き続きのご理解とご協力を賜りますようお願い申し上げます。

厚真町長　宮坂 尚市朗